
リスカ、少女を嘲笑う

長崎秋緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リスカ、少女を嘲笑う

【Zコード】

Z2891E

【作者名】

長崎秋緒

【あらすじ】

いじめの対象だった園子にそそのかされ、わたしは初のオーバードーズ体験をする。

女子トイレのドアノブに手をかけたところで、わたしの大嫌いな子と出会った。

いつも下ばかり向いて、何考えてんだか分からない園子は、わたし達の“捌け口”として、時には下腹部を蹴り上げられたり、眼鏡を便所に投げ込まれたり、わたしがやつたのは、教科書をゴミ箱に隠す程度のかわいいものだった、と思う。

なんの抵抗もしない、いくじのない園子は、わたし達を相手にしていないといわんばかりに表情を崩さなかつたので、強がるんじやねえよ、とさらにわたし達のいじめは度を増していった。

そもそも卒業も近いし、そんなことにも飽きてきていたので、わたしは園子を無視してドアを閉め、用を足した。

再びドアを開けた時、目の前に園子が両手に何か握つて立つっていた。

「なに？ 今頃やり返そうっての？ ひとりだからやれるとか考えてんなら

「違うの……」

園子は手首に巻かれた包帯をわたしに見せて、自分が精神疾患の持ち主であること、リスクや〇〇していることを打ち明けてきた。「だからなんだっての？ 同情するかよ。かまつてちゃん。死にたいなら頸動脈切りなよ、一発で死ねるらしいよお

園子は握っていたものを差し出してきた。

透明のプラスティック製のケースには、銀色と胴色に包まれたクリアがたくさん入っていた。同情するかよ。

「それ飲んで、がんばって生きていってね、気違いちやん
園子が覆いかぶさるよう、わたしの片腕を掴み、

「わたしの苦しみなんかしらないくせに」

「うん、知らない。じゃあね、手を離せよ」

園子が両腕でわたしの左手を強く掴み逃がそうとしない。空いている右腕で園子の頭をはたく。

「おまえ、なにがしたいんだよ。わけわかんねえよ」

乱れた髪を直しもせず、はたいた拍子に便所の床に落ちたクスリケースを園子が拾い、

わたしを恨めしそうに見ている。

「わたしだけじゃなかつたでしょ？ 大体復讐するんなら、まず坂下が先だろ。あいつが一番あんたを蹴つてたじゃん」

園子は首を横に振り、そうじやない、復讐なんて考えてない、と繰り返す。

以前、わたしが教室で、

「ドラッグとかやってみてえ」

そういうていた、と園子がまたクスリケースを差し出してきた。
「これ合法ドラッグだから……、湯川さんには助けてもらつたことがあつたから、お礼……」

そういうえば、坂下達と四人で園子を、トイレの角っこに追い詰めて制服の上から便所スリッパで“型”をつけて遊んでいた時、坂下のスリッパの先が脱げ、園子の脣を切つたことがあつた。そのまま蹴るのを止めようとしない坂下を、ほんの気まぐれで制したことを、園子が言つているのだとしたら、お笑いだ。お人好し過ぎる。

「さすがに、顔はね。女だし、と思ってさ」

だからなの、と園子はクスリをあげるのはあなたにだけだから、坂下達には秘密にしておいてほしいと頼んでくる。

そんなこと頼まれるつもりもなかつたが、園子の合法ドラッグには興味がある。

実はわたしも、密かにリスク、とかボダとかの言葉に憧れがあつて、ちょっとだけ、二の腕に傷をつくりうつとしたが、おじげづいて皮を軽く擦る程度にしか出来なかつた。

先程のやりとりで、園子の包帯からは血が滲んでいた。その隠された傷の深さが、いくじのないわたしへのあてつけに感じられ、わ

たしは坂下達のグループに入り園子いじめに加わったのだ。

思えば、こいつに何の恨みもない。わたしは園子に嫉妬して、いじめる側に回つただけだった。

「そんなにいうなら、もらつてあげるけど、通報とかする気じゃねえだろうな」

「そんなことしたらわたしも捕まる……」

「ケースごと制服のポケットへ入れ、出て行こうとしたら、園子が、佐々木君もわたしと同じ病院に通つているよ。今入院中……」

園子のいう佐々木とは、わたしが入学当時から目をつけっていた同級生だった。

弱そうな体つきのくせに、妙に落ち着いたところがわたしの気を惹いていたが、坂下達の手前、髪にワックスをつけ毛先を遊ばせることもなく、香水もつけていない、そんなダサいタイプが好きだとは言えずに入った。

「あんた佐々木と知り合いなの？」

「よく話しかけてくるから、佐々木君。病院の中でだけど」

そういえば、ここ数日佐々木は登校していなかつた。この時期だから登校自体は各個人の自由みたいなもので、佐々木はセンター試験に向け追い込みに入ったのだとばかり思つていた。

あいつは頭がいいから頭の良い奴のいく大学へ行くのだろう。わたしの手の届かないエリートに将来なるだろう佐々木に会えるチャンスは今しかない、と園子がわたしに、ここでODすれば、佐々木と同じ病院へ入れるようにしてあげる、とOHDとはおくすりを飲みすぎることなの、と今更な説明をしてきた。

「しつてるよ、それくらい。おまえらだけの言葉じゃねえよ」

「こいつ、やっぱり勘にさわるわ。でも佐々木も園子と同類だったなんて許せない。

「ここ便所だから、場所変えてやるわ」

わたしは園子の提案で保険室へ向かつ。

部屋の中は誰もいない。保険の先生も休みをとつてているのだ、と

園子がわたしに、

「湯川さんが眠つたのを確認したら、わたしが職員室に先生を呼んでくるから」

最近の精神薬は大量に飲んでも死ぬことはほとんどないらしい。安全性は高いから大丈夫、と園子が

「でも、初めてのひとは地獄を見るかもしれない……」

「こいつ今になつて脅しかよ。ふざけんな、びびるかよ。

「じゃあ、ラリつてくるから、あとよろしくな」

わたしがペットボトルの水と、園子に手渡された、ラムネ菓子をさらに小さくしたような錠剤の粒どもを一気に飲み込んでやつた。園子は驚く様子を見せない。普段からやりなれてるのだろうか。こいつより遅れて体験することが屈辱的だつたが、これで同等だ、やつた。わたしもメンヘラの仲間入りだ。「ぞまあみら…せせきとおなじへらにいて……」

ろれつがまわらなくなつてきた。ぼんやりとしか物を見られない。酒に酔つた時みたいだ。

園子が、鼻で笑つた。こいつむかつく

いい加減黙れよ、やかましい

騒がしい。誰かが騒いでいるのを抑え付けているらしい。迷惑なやつだ。保健室に来んなよ。今〇〇してる最中なんだから……。

ベッドの底が厚い。保健室のはもつと薄くてちよつと寝返りをうつただけで、パイプの銷付いた軋む音をさせるの。△の△

「ああ、起きた。日野さん、みてよ」

「今、手が離せない」

「ちえ、じゃあ、かつちゃん。きてよ」

ヒゲ面の小汚いおつさんがベッドの脇にいて、入り口に近いベッドの上で俯きなにかしている細身の男を呼んだが、拒否された。

日野さん、と呼ばれた男は、片腕を縫つていのよつなしぐさを繰り返していた。

その日野さんの代わりに呼ばれた大柄の男が、つらがつて息を吐き、

ベッドから身を起こした。

近づいてきた男は汗つかきのようで、手にバスタオルを持つている。「うあ、あせくせえよ、こいつ。

「大丈夫？」一杯吐いてたね。ちょっともちらりちらつた。ふふふ「すきだね、かつちゃんも。女子高生だもんな、そりや興味あるわな。俺は範囲外だからそんなことしてないよ、最初に言つておくけど」

ヒゲ面の男は、山口と名乗り、これからよろしくと握手をもとめてきたが、浅黒く毛深い山口の腕に血の気が引く思いがした。わたしは、日野さんの方に手をやった。

「ああ、日野さんはうまいよ。なんせ、自分で切つた傷口を自分の手で、それも片手で縫つちゃうんだから、まさに医者要らず」

山口が、日野さんは腕を切り刻み過ぎて、腐敗する寸前なんだと笑い話のよう語り、片腕がなくなっちゃえば、あんなこともしなくて済むようになるから好都合なんだよ、本人にとつては。「ま、そのあたりのことは、おいおい話してあげるね。あ、やつちやつた。かつちゃんダメだつて、まだ生えかけなんだから、もう少し我慢しようよ」

かつちゃん、と呼ばれたデブが爪を噛んでいた。わたしの胃の奥がざわめきだした。いや、もうさつきから何度も、目眩と吐き気に襲われていた。それすらも鈍感にしか動かないほど、この光景はふつうではなかつた。

「ほら、齧ってるじゃない。だからもうちょっと待とうな、かつちゃん」

なにか吐き出したいのだが、なにもでてこない。喉がひりひりする。口内が胃液臭い。

「かつちゃんね、大好きなの、爪が。だから、かじつちゃうのね。無くなつちゃうまで。今再生中だからやめとけつていつてるのに、全部生えてから、いっぺんに食べたほうが食べ応えがあると思わない？」

山口はかつちゃんの両腕を後ろで交差させ、なにか呪文のような言葉を繰り返し、テープの耳元で囁いている。

そのうちテープが「く」くとうなずき、ベッドに戻り横たわる。眠つてしまつたのだろうか……。

「あーすつきりした」

開きっぱなしの病室へ爽やかな声を響かせ若い男が入ってきた。

「おお、起きたかお嬢ちゃん」

この男は短髪で、浅黒い肌をしているが、サーファー系に見えなくもない。筋肉もありそうだ。顔もハーフっぽい。

「竜一くん。」きげんだね。またやつたの

「へへ、管なんて探せばいくらでもですよ。なんてつたつて、ここは病院なんですから」

山口と、竜一くんが示し合わせたような含み笑いをする。

「あの、なにしたんですか？ 楽しそうですね。あ、わたし湯川

「オナニー」

竜一くんが、下腹のあたりで片手を、棒を握つたような形に上下に振る。

「かわいい。恥ずかしがるそのしぐさ。でも想像と違つよ」

「抜くことにはかわりないじゃないか」

「ですね。お嬢ちゃん、俺一発抜いてすつきつしたの。血をね、500mlくらいかな、見せてあげたかったな、残念」

「次の機会でいいじゃない」

「友田さんがビーカーごともつてつちやつたんですね」

竜一くんの右腕の内側に注射針を刺したような痕がいくつもあつた。血がうつすら垂れてきてるし、それにまったく関心をもたないで、山口と、血の色の、一番良いのは固まりかけの色に限る、と結論をつけた。

「素人は鮮血だらうけど、おれらくらいになるとやっぱ濁り具合に魅せられるんだよね。その辺はやっぱ歳の差かな」

「はは、竜一くん。君まだ二十歳だろ」

「でも、おれ、ここじゃ山口さんの次に古いですよ」

「どうやら、竜一くんは中学時代から入退院を繰り返しているらしい。ボダだともわたしに教えてくれた。」

「で、お嬢ちゃんは“なに”」

わたしは

「リスク……と、鬱とボダもちょっと入ってるかな……」

山口と顔を見合わせ竜一くんは、あいかわらず爽やかな笑顔だ。

「ハッピバースデーツウーゴー」

また別の男がやってきた。患者の食事を運ぶキャスター付の台の上には赤紫色した、市販品の一倍はある大きなプリン状のものがつっていた。

「あ、それ、友田さん。俺のでしょ？ それ俺の血でしょ」

「竜一くんがタイプだつていうから、どうせならと思つて」

「だから、さつき俺の血くれつていつたんですか。友田さん血抜きしないのに不思議だなって思つてたんですよ。でも誕生日じゃないですよ」

「その娘の入院祝いだよ」

友田というかつぱみみたいな秃げ方をした、おそらく山口と同い年だろう、その男がわたしのベッドヘキヤスターをカラカラならし、竜一くんの血で作られたプリン状のものをわたしへどうぞ、と差し出してきた。

「……まさか、食べるんですか？」

山口と竜一くん、友田が一斉に大声で笑いだした。

「まさか。食べたきやそうすれば、おれらはかんべん」

竜一くんは横つ腹を抱え笑いを堪え切れないといったふうで、目頭に涙まで溜めている。

「ここ、K総合病院じゃないんですか？」

また笑い出した。みんなして。なにがおもしろいんだよ？ こい

つら。

「わたし帰ります」「

「無理だよ」

「「」うちの病院は“やぶ”だから、ひどいもんだよ。」「コースとか見てないの？ それでここに来たんじゃないの？」

早口に喋る友田の後に続いて山口が、

「クスリの多量処方で、こここの先生の一人が捕まつたの。そのくらい“やぶ”」

もし、君が帰りたいなんて叫んで暴れてもしたら、たちまち『個室』行きだよ」と薄笑いを浮かべる。

「……どうすればいいんですか？」

「おとなしくしておきなさいね」

「どのくらいですか？」

「そりや先生がいいて言つままでしょ」

「どれくらいでそつと言つてくれますか？」

「俺は患者だから決めかねるねえ」

そういうて山口がわたしに小汚い手を差し出してきた。

「これからよろしく湯川秀美さん」

園子のやうう、だましやがつたな。ここには佐々木はいな「どこのか最悪だ。

地獄だ。園子の言つたことばのことがだつたのだ。」「」とは自由がない。逃げることができない。

こんな状況で、気も狂わずに平常心で過ぐせるわけがない。わたしも早く慣れなければ、ここにからに飲み込まれてしまつ前に、この状況に慣れるしか道は無い。

あれ、慣れるということは、わたしもここにからの仲間になるということか。やつた。わたしも本物のメンヘラの仲間入りができるんだ。

わたしは日野さんのように自傷した痕を片手で器用に縫うのだ。竜一くんに血抜きを教えてもらつて親しくなる。かつちゃんとまたく、爪の血をの分かる舌を持ち、山口みたいに、新規さんがくる度に

ここでのしきたりを優しく説いてあげるのだ。

わたしは園子を超えたメンヘラになつた。リスクなんてかわいいもんだ。なにあの未練つたらしい包帯。

わたしは園子に勝つた。ざまあみろ、わたしこそ真のメンヘラなんだぞ。ここを出たら、わたしが園子を鼻で笑つてやる番だ。

ベッドの上で立ち上がり、わたしが勝利の雄叫びを上げると、皆が一斉にわたしに続いて、低く、野太い、地響きのよつたな叫び声を上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2891e/>

リスカ、少女を嘲笑う

2011年9月11日03時23分発行